

あい さわ まさ ふみ
相 澤 雅 文

学位の種類 博士（教育学）
学位記番号 教博 第 135 号
学位授与年月日 平成 24 年 3 月 27 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条 1 項該当
研究科・専攻 東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程）
総合教育科学専攻
学位論文題目 集団適応に困難をかかえる児童の社会性発達に関する研究
論文審査委員 (主査)
教授 本郷 一夫 教授 上埜 高志
准教授 神谷 哲司

〈論文内容の要旨〉

児童期は、様々な人や物との関係を通して社会化が促される時期である。しかし、そのような時期にあつて、集団にうまく適応できずに十分な社会性の発達が達成できない児童もあり、それらの児童に対する支援の在り方は学校教育の観点からだけではなく、発達心理学においても重要な課題となっている。そのような点から、本研究は、集団適応に困難をかかえる児童の社会性発達のプロセスとそのプロセスに影響を及ぼすメカニズムを明らかにすることを目的とした。本研究の構成と内容は以下のとおりである。

第 I 部「問題と目的」は 4 つの章から構成された。第 1 章では、問題の背景と本研究の基本的な立場を示した。第 2 章では、児童期の社会性発達に関する研究を、第 3 章では、集団適応に関する研究を概観するとともにその問題点を指摘した。そして第 4 章では、第 1 章、第 2 章、第 3 章の検討を踏まえ、本研究の目的と仮説について述べた。その際、適応については、子どもの集団適応を子どもの外側から捉える視点である「外的」適応と子ども自身の適応感から捉える「内的」適応の 2 つの側面に着目した。また、子どもの不適応行動については、それを「外在的行動」と「内在的行動」の 2 つに分類し、その発達的变化と男女差に着目することにした。

第 II 部「集団適応に困難をかかえる児童の様相」は 5 つの章から構成された。第 5 章（研究 1）では、小学校下学年児童の外在的行動及び内在的行動の特徴について「外的」適応の側面からの

検討を行った。その結果、学級担任が集団適応に困難さをかかえると捉えた児童は約8割が男子児童であった。また外在的行動特徴については男子が有意に高い平均得点を示し、学年の違いでは1年生の平均得点が顕著に高く、学年が進むにつれて下がる傾向が示された。

第6章(研究2)では、下学年児童と上学年児童との外在的行動及び内在的行動について「外的」適応の側面からの比較を行った。その結果、外在的行動は学年が進むにつれて減少の傾向にあるが、内在的行動は増加の傾向を示し、とりわけ女子にその傾向が強く表れているという結果が示された。

第7章(研究3)では、小学校上学年児童と中学生との外在的行動及び内在的行動について「外的」適応の側面から比較を行った。中学生では男子の外在的行動は減少し、女子の外在的行動は増加するという結果が示された。一方、内在的行動については男女ともに増加する傾向にあり、男女の特徴が類似するようになった。

第8章(研究4)では、集団適応に困難さがあると捉えられた児童の「外的」適応の側面と「内的」適応の側面とを比較し、その「ずれ」を検討した。小学校下学年では「外的」適応と「内的」適応の両側面の相関が高く、上学年では相関が低くなっていた。このことから児童の学年が進むにしたがって「外的」適応と「内的」適応の両側面は乖離していく傾向にあることが示された。

第9章(研究5)では、集団適応に困難をかかえる児童への支援と行動変容に関する事例的研究を行った。対象児及び対象児とのトラブルが多い他児に対してそれぞれの「内的」適応に関してのアセスメントを行い、その結果に基づいた支援を行った。その結果、両者の「内的」適応の側面が改善し、それに伴うように対象児の「外的」適応の側面も改善された。これらのことから集団適応に困難をかかえる児童への支援では環境調整を行うことが重要であることが示された。

第Ⅲ部「討論」は2つの章から構成された。第10章では、研究1から研究5の結果を踏まえ、集団適応に困難をかかえる児童の社会性発達のプロセスとそのプロセスに影響を与えるメカニズムについて考察した。すなわち、本研究では従来から集団適応の困難さを捉える際に着目されてきた外在的行動に加え内在的行動の観点からの検討を行った。外在的行動は学年とともに減少し、その一方で内在的行動は増加していくといった社会性発達のプロセスが明らかとなった。そのプロセスに影響を与えるメカニズムとして「外的」適応の側面と「内的」適応の側面が発達とともに乖離していくことが示された。また、「外的」適応の側面における内在的行動の増加は、新たな外在的行動を生み出していく要因となるといったような、外在的行動と内在的行動の関連性についても明らかとなった。以上の点から集団適応に困難をかかえる子どもの社会性発達に関しては、外在的行動と内在的行動といった2つの観点と併せて、「外的」適応と「内的」適応といった2つの側面から子どもの不適応行動を捉え、支援していくことの重要性が示唆された。

第11章では、本研究の応用と課題が示された。このうち今後の課題としては、縦断的研究デー

タの解析を進めることと、学級集団が個に与える影響と個が学級集団に与える影響の循環性についてさらなる検討が必要であることが示された。

〈論文審査の結果の要旨〉

社会性の発達発達心理学において古くから関心が持たれ、多くの研究がなされてきた領域である。社会性の概念も時代とともに変化し、古くは、その社会の慣習にどれだけ従うことが出来るかといった点からその発達が論ぜられることが多かった。しかし、20世紀後半以降、社会的規範の遵守だけではなく、ある個人が社会の一員としてどのように新たな社会や集団を構成していくことに寄与するのかといった点から社会性の発達が検討されるようになってきている。また、近年では、子どもの社会性発達と集団適応の観点から、保育・教育場面において、「気になる」子どものように集団適応に困難を抱える子どもたちの理解と支援についての重要性も指摘されるようになってきている。そのような流れの中で、集団適応に困難さを抱える児童に焦点を当て、その不適応の特徴とそれが生じるメカニズムを明らかにすることによって、児童期の社会性発達のプロセスを描こうとした本研究は、主として次の3つの点において評価できる。

第1に、従来、社会性の発達は、教師などが捉える「外的」適応の側面、その中でも多動、衝動、反抗的行動、暴力的行動などの外在的行動の側面から捉えられることが多かった。しかし、本研究では、児童の社会性の発達を教師が捉える「外的」適応と本人が感じる「内的」適応の2つの側面に分けるとともに、不適応行動を外在的行動と内在的行動の2方向から捉え、集団適応のパターンを4つに分類し、その特徴を明らかにした点である。

第2に、子どもの発達に伴う不適応行動の循環性について明らかにした点である。すなわち、①発達に伴って外在的行動が減少し内在的行動が増加し、②次に増加した内在的行動が「内的」不適応状態を高め、③その不適応状態が新たな外在的行動を生み出すといったように外在的行動と内在的行動の循環性があることを示した点である。

第3に、データの豊かさである。外的適応を扱った研究1～3では、のべ1000名以上の「気になる」子ども、集団の適応に困難さを抱える児童・生徒に関するデータを収集している。また、「外的」適応と「内的」適応を扱った研究4では、100名以上の「気になる」子どもを含む1300名以上の児童を対象として、児童自身が感じる適応感について明らかにしている点である。

発達に伴って生じる「外的」適応と「内的」適応の乖離を引き起こすメカニズム、男女の社会性発達のプロセスに影響を与える仲間関係の役割についての考察には残された課題もあるが、社会性の発達を描く新たな枠組みを提示し、多くのデータを用いてその枠組みの有効性と児童期の

社会性発達メカニズムを明らかにしたことは、発達心理学に新たな知見をもたらしたと判断できる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。